「　衛星の用途は洋々！　」　　（協同組合通信/日和見論弾）　　05．03．16

待ちに待った人工衛星の打上げ成功だ。春の宇宙の闇に希望の星が輝いた。05年2月26日18時25分曇り西南西の風１m/s程度。直前まで種子島宇宙センターは、打ち上げ延期の再点検に、ぴりぴりした緊張に包まれていた。

03年11月の打上げ失敗以来、宇宙航空研究機構のロケット技術や組織のあり方、その存在意義と科学技術の能力まで、信頼が失墜しかけていた。この間、13 億超の意気軒昂な中国は人間衛星打上げ成功で、両国の差は開いている。

最早、失敗は許されない試練・土壇場の中での大改革。理事長には、元ＮＴＴドコモの立川相談役が抜擢され、危機感をその経営力と統率力で、底力と意地に変えた。短いコメント「神頼みはしない。人事を尽くした人々に失礼だ」が多くを語る。南国の果てなき空を突き抜けたＨ２Ａは関係者の期待を一杯載せて、見事に花を咲かせた。

昨今、インド洋大津波以後に、日本の地震・津波観測技術への国際的評価と期待が高まる。大手町の気象庁では、任務の重さにスタッフ20人が歴史的一瞬を息を潜めて見守った。

今の衛星情報は米国のゴーズ9号のデータを買っている。既に老朽化し、いつデータが休止するか明日をも知れない。この打上げの是非は、わが国の天気予報の明日をも左右する。進む温暖化、多くなる台風の上陸、梅雨時の大雨など気象現象のゆらぎや異常は増すばかり。日本はもとより、東南アジアの防災現場や農業・漁業まで正確なデータ収集と一次産業への応用に用途は洋々。

今回は国交省と気象庁が、初めて民間のロケット会社に委託。その努力や営業力も見逃せない。大きく水をあけられている事実はあるが、国際競争が高まる宇宙開発ビジネスに、再挑戦の第一歩。関係者ご一同の執念と努力に心から拍手。

地下のナマズも眠りを忘れ歓喜の踊りを舞った。運輸多目的衛星が順調に計算軌道に乗った後、21時37分青森県東方沖で震度４の地震。佐渡島や中越でも震度の地震が相次いだ。まさに、この衛星の果たす役割を火山列島特有の地震が示した。科学技術の成果の自信も記録された春を迎える一夜の出来事。

（　気象情報システム株式会社　高　津　敏　）